

第15回

書道監修・執筆 川合広太郎

書いてこそ美しい和歌 ～「高野切」～

今回学ぶこと

今回、臨書に取り組むのは平安時代の後期に書写された古今和歌集の写本のひとつ「高野切」だ。仮名の書は墨色や墨量の調節も重要。体験しながらちょうど良い色や筆につける量を知ろう。また、文字をつなげる連綿も重要な要素だ。文字は小さくても力強くダイナミックな動きを表現しよう。

学習前チェック！ 用語の意味を確認しておこう

和歌／平安時代／高野切／高野山／古今和歌集／連綿／変体仮名

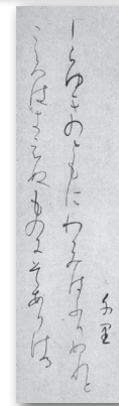
「高野切」古今和歌集の写本

平安時代の前期に、それまで詠まれた優れた和歌を千首以上集めた古今和歌集が編纂された。それを書き写した「写本」のひとつが「高野切」だ。もともとは20巻ほどの巻物だったが、時代とともに散逸し、現存するものはわずかだ。その中の多くが部分的に切り取られ、掛け軸として鑑賞することが行われた。「切」と呼ばれるのはそのためだ。その一部が高野山に伝えられたことから「高野切」と呼ばれるようになった。書風の違いで3種類に分けられているが、今回は第三種に取り組む。仮名の代表的な作品として昔から多くの人が学んできた。

変体仮名を知ろう

平安時代の貴族たちは、漢字の草書の姿をさらにアレン

今回のお手本



(部分)

高野切第三種
(平安時代・11世紀中頃)

伝紀貫之

(拡大版は50ページ参照)

今回の課題

- ①高野切の臨書。和歌を書こう。
- ②連綿、変体仮名、そして墨色、墨量を学ぼう。

ジして日本独自の「仮名」を創り出した。もともとは一つの音に複数の仮名を使っていた。複数の仮名を使ったほうがより変化に富んだ美しい表現が可能だからだ。なるほど古筆を見ると、多くの仮名が使われていることがわかる。

しかし、明治時代に政府は教育政策の一環として一音に対して一字を決め平仮名とし、残りを変体仮名と呼び区別をした。それ以来、変体仮名は日常生活から姿を消していった。

つなげて書こう

「高野切」を見てみると、その多くの文字がつながって表現されていることがわかる。このように文字をつなげて書くことを「連綿」という。

連綿は現代に生きる我々にとってみると作品を読みにくくする要因でもあるが、仮名の美しさを成立させている大切な要素でもある。仮名と仮名を結ぶ連綿の線は決して緩まず、のびやかに力強く引こう。

達人からひと言！

高野切の文字はとても小さく、繊細で流麗な姿に映る。しかしよく観察してみると、力強くのびやかな線で書かれていることがわかる。また仮名の書の美しさを成立させているものに「連綿」がある。ただつなげればよいのではなく、連綿にはあるパターンがある。

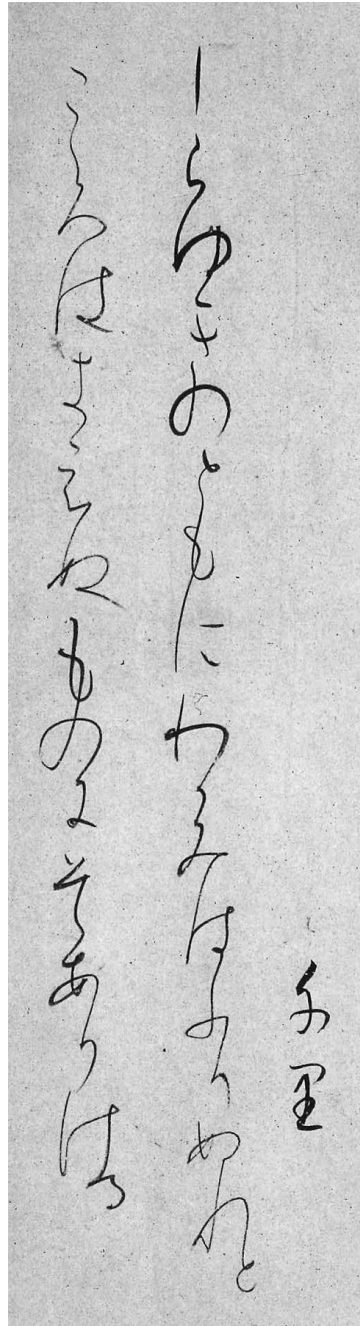
連綿する線の表情やリズム、字形の変化にも注目しながら書こう。安定した線を引くためには墨量を少なめにする 것도重要だ。さあ、平安時代の遺族の息吹を感じながら臨書に挑戦しよう。



達人

川合広太郎

高野切第三種



(部分)



(拡大)

しらすのともに見がみはふりぬれど
 こころはぎえぬものにぞありける